

畜産試験場だより

和牛試験場

7月号の和牛試験場だよりで、和牛の将来の見通しと、併せて試験場の近況などをお知らせしましたが、今回はグッと趣向をかえて、当場の昔話をしてみましょう。

9月ともなればここ県最北端の地千屋は秋の気配十分です。夏舎飼（なつまや）を過ぎた牛は9月の声とともに再び放牧されます。このことは、今も昔も全く変わらないで、毎年繰り返されています。

◎大正10年11月、時の岡山種畜場（上伊福別所）の分場としてこの施設ができ丁度42年たちました。この長い間和牛の改良とそれにまつわる色々な仕事を担当して来たわけです。そしてその実績は積もりつもって県内外の和牛改良に、畜産技術者の養成に、また自家経営者の修練に多くの貢献を果して来たと思います。この42年間県内外の畜産人に親しまれ、そして500有余人の技術者を養成した「千屋の種畜場」は他に例のない位全国に親しまれて来たと思われれます。そして、此の間場に購入されそして広く県内外に出されて、和牛の改良に貢献した種牛はこれまた数多く、全く何頭位いるか数えられないほどです。このようなことを考えていると、和牛試験場をご存知の方少しでも千屋の飯を喰ったことのある方は、遠く近く懐かしい思い出がおありのことと思われれます。

このような意味で、本号を借りて分場の、種畜場のそしてまた試験場のことを懐かしく思い出していただく一、二のことを申しあげて見たいと思います。

◎牛神様のこと、詳しく言いますと「和加布都努志神社」でございますが、祭神は「和加布都努志乃命」でございます。牛舎の上の運動場—最近では牛が分散したのでここを利用する事が少なくなりましたが昔は視察見学があると必ず運動場に繋いで見て頂いたものです—この運動場の西南の隈に鎮座している社です。この社は開場と関係あるもので、大正10年

11月開場直後、翌11年9月6日初代橋本場長により遠く出雲大社から勧請したもので、二代内田場長が大正12年8月27日現在地に移動したとなっていてます。従って場ができて2年半位は今の運動場はなかったようです。この神様が和牛の神様か牛の神様かよく判り兼ねますが、出雲の神様一族の分身となると岡山県では一番古い神様ではないでしょうか。

◎初代橋本二代内田場長のころは遠い昔でご存知のお方も数少ないことと思われれますが、三代掘場長のころからが一番思い出の多いことと存じます。偉大な体軀に地下足袋巻脚絆、共進会の審査等でニッコリともせず審査を進められる姿を思い出す人は多いことと思います。当時の場（分場から種畜場）は畜産修練道場の感十分でした。暗い内から起きて東方遥拝、祝詞を上げて天突き運動、そして一日の作業が始まったものです。当時は牛飼いから米作りまで一般農家のやることは全部やったものです。

4月の終わりから5月にかけて沢山の育成牛が一度に入場して来た者です。これを3—4日運動場に出して強弱の序列をきめて後放牧したものです。当時は現在の追込牛舎の上は大杉の放牧場で、夜はここに帰って休むのをよく見に行かされたものです。谷より右側は全部自然草地で、今の育成牛舎は昭和11年に、肥育牛舎は昭和33年に出来たもので、当時は雑草竹藪の雑地でした。当時の伝習性（現講習生）は育成牛を2頭位受持として決められ、手入れ、矯角削蹄、調教等をすべてやらされたもので、当時の牧夫長佐野民三郎さんがこれを担当、なかなか厳重なものでした。

◎そのころ千屋の太田家直系で大田主事兼技師がおられました。今考えると縁なし眼鏡にチョボ髭、何となく天皇陛下を思い出すような風貌の人でした。当時仕上げた種雄牛の配布は、全部牛踏をうって追い立てたものです。作州地方の方は菅生または上刑

岡山畜産便り 1962.10

部越えで追って帰られました。現在は自動車で数時間で帰れる時代となり全く今昔の感にたえません。

昭和12年支那事変、同16年太平洋戦争となり、堀さんの転出（三徳塾）後は四代竹原場長となりましたが、丁度世紀の大戦争、人もなく手不足、そして終戦、戦後のドサクサ、その後に来た畜産の急速な進展を経て現在に至ったわけです。大方の読者は何故このような昔話をしたのか判断に苦しむ向もあるかも知れないと思いますが、さて、このごろの畜産を取りまく諸情勢の変革は目まぐるしく、進展する畜産に対処するためには40年の施設建物は老朽腐朽、立地条件は日ましに悪化のなげきを禁じ得ません。施設拡充に先輩読者各位のご援助をお願いしたい気持切なるものがあります。

（8月28日 瀬島）